支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「川の話」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

私の実家の前には川が流れ、近くには田んぼへの用水を分岐する堰がありました。地名もそのあたりは、〝せきば〟と称していました。

そのコンクリート製の堰は、当然水面近い高さであるため、地面からはそこそこ低く、かつ水路が二本あり、真ん中にある足場は狭いものでした。

子どもたちが川向かいに遊びに行くには、その堰を飛び越えるか、上流側の橋を遠回りするしかありませんでした。当時、子どもの世界は容赦ありませんでした。一緒に遊んでもらうには、堰を飛び越せない小さい子どもたちは遠回りのコースを必死に走り、追い付くしかありませんでした。この堰の克服には、地面との段差を一気に上下することと、真ん中の足場に立ち止まらず、一気に二つの水路をポンポンと飛ぶことでした。多くの少年が何度その堰越えに挑戦し、水路の急流に流されたことか。

流されたうちの一人、青田少年は挑戦するたびの緊張感と、飛び越えられるようになり新しい世界が広がった達成感を、昨日のように思い出すのです。

実家の前の小さな川は、小さいころはそれなりにきれいで生活には欠かせないものでした。

川下には馬が入るための坂道がありました。農作業を終え帰宅し、鞍を外され裸馬になり汚れた体を洗ってもらうために、馬はその坂道を下り浅瀬に連れていかれるのでした。浅瀬に着くと馬が決まってまずするのは、水飲みでした。馬は牛と違って吸うことができるので、川面に口をつけると動きが止まるのです。水飲みは、どこにそんなに入るんだろうと思うくらい長い時間でした。水飲みの後は土手の草食いです。朝につけられて口の中の金具が無い状態でのその草を食む姿は、本当に気持ち良さそうでした。

そんな折、青田少年は裸馬の背中に乗せてもらい、鬣（たてがみ）を唯一のつかまるところにして、ひととき馬上の人になるのでした。

馬を洗う水音と、草を食む馬の息づかいが夕暮れに流れていました。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める